

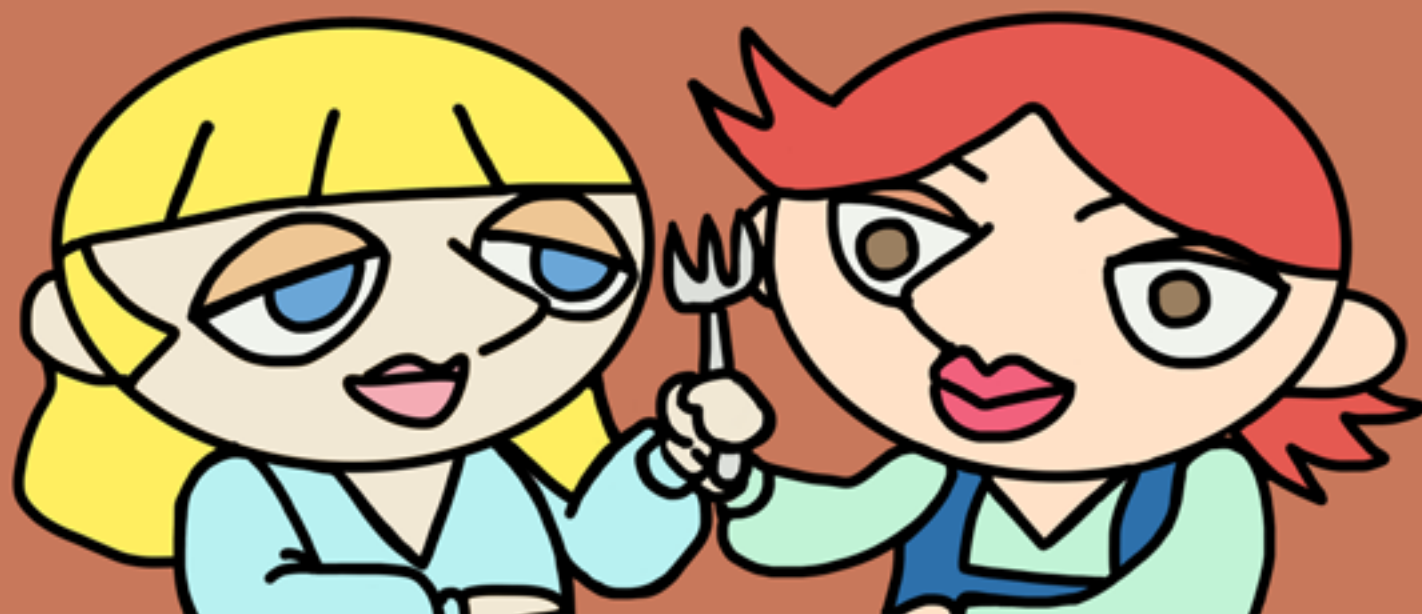


O・ヘンリー 原作

最後の一葉

文/絵 しい たどる

「あっはっは! ねえ、ジョアンナ。やっぱりチコリーのサラダって言ったら、エンダイブよね!!」
「ほほほ! ジョンジーでいいわ、スウ。エンダイブって1年の寿命しかないから、その潔さがいいわ!!」
「そうそう、それがエンダイブの美味しさの秘密よね!!」
二人は、たまたまランチを同席した他人どうしだったが、チコリーのサラダのことで意気投合していた。
「ジョンジー、あなたとは何故か気が合うわ! 着てる服も同じだし!! 劇的な出会いってヤツかしら!」
「スウ、これは運命! 私とあなたの出会いは、きっと神様の思召しだわ!! ああ、ありがとうございます、神様」
「ねえ、ジョンジー。あたしと一緒に住もうよ! あたしは絵描きだから部屋じゅう絵の具で散らかってるけど、
二人で住むには最高の部屋よ!!」
「ああ、スウ! 私は画家になりたかったの。あなたと一緒になら、リっぱな作品を描けるわ!!」





「チッ、くだらねえ。
世の中、このジュニパーベリーの匂いに勝るものが無さ過ぎる。
チッ、くだらねえ…」
ジンの瓶を片手にした一人の老人が、アパートの入り口でぐだを巻いていた。

「ベアマンさん、今日もテルピン油臭いぜ」

「ホント、くせえ、くせえ」

「またヌードモデルをやってくれよ」

「負け犬臭くて、ダメってか」

「うるせえ、エセ画家の卵にもなれねえ野郎どもが。
ジュニパーベリーを包み込んでるジンの芸術性など、死んでもわからねえだろうよ」

「人生負け犬の悪臭が移るとマズいから、サッサといこうぜ」

アパートの住人たちは、ベアマンと呼ばれた老人に悪感をつきながら去って行った。

「チッ、くだらねえ」

ベアマンが再びジュニパーベリーの匂いを浴びようとした時、スウの音が聞こえた。

「こんにちは、ベアマンさん。紹介するわ。あたしの大親友、ジョアンナよ」
「こんにちは、ベアマンさん。スウと運命の絆で結ばれたジョアンナです。ジョンジーと呼んで下さい。
ベアマンさん、その芸術性の高いお酒を、私の父親に紹介したいわ」
「さっ、ジョンジー! 早くあたしの部屋へ行きたいでしょ!!」
「ええ! だって、二人の素敵なアトリエだもの!!」
二人の消えて行った入り口を見つめ、ベアマンは画家を目指すことになった一枚の絵を思い出していた。





ベアマンが少年の頃に出会った一枚の絵、そこに描かれていた一人の女性。

ベアマン少年は、その女性に恋をした。

そして、その女性を常に自分のそばへ置いておきたくて、絵筆を持ったのだ。

その女性が、いま目の前に現れた——。

スウとジョンジー。

二人の生活は、他の人間から見たら濃密な関係だろうと疑わずにはおれないほど仲が良かった。

それからのベアマンは、二人に気づかれないようジュニパーベリーの匂いを押し殺しながらジョンジーの姿を追っていた。

「コホッ、コホッ…!」

ジョンジーが突然熱を出し、二人のベッドで寝込んでいた。咳が止まらない。
この界隈では、肺炎が蔓延していた。

「スウ。私、肺炎みたい。それだったら、もう、ダメかも……」

「ジョンジー! そんな悲しいことを言わないでよ……」

「……スウ、あなたに奪取られて逝けるなら、本当に幸せだわ」

「ジョンジー…、あなたの最期を奪取るのは、やはり、あたしの使命だったんだね!」



どこで聞きつけたのか、医者が往診にやって来た。
そして、ジョンジーを診察した後、スウにあることを話した。
「スウさん。ジョアンナさんは、ただの風邪です」

「…か、風邪!？」

「ええ!ただの風邪です!! ジョアンナさんは他の街でも、
ただの食べ過ぎなのにコレラだと思い込んで、
大騒ぎしたことがあるんです。
いや、この横も振りまわされました。」

「ジョンジーは、ただの風邪だったんだ」

「ええ! ジョアンナさんには振りまわされましたが、
それでもあなた方のような下町の人々を診察するのは、
僕の義務でもあるし、そんな自分を僕は好きなんです」



「昨日まで二千八百四十六枚あったのに、今日は千三百七十五枚まで落ちたわ……」

「え? 何が落ちたの、ジョンジー?」

「隣りのアパートの壁に、いまいましてはびこってるツタの葉っぱの数よ!」

「あ、そうなのジョンジー。あんまりイライラすると、身体に毒だわ」

(ああッ! ジョンジーが回りを振りまわすのは、

自分の存在をアピールしたいからなのね。

引っ越し生活が長かったから、

みんなに甘えたいのよ、きっと!!

ジョンジー、

あたしが絶対治してあげるツツ!!!!)





ある日、二人の部屋の前に、ベアマンが立っていた。
スウがジョンジーのための買い物へ行こうと、何気に開けたドアの影に隠れるように立っていた。

「あれ?ベアマンさん、何か用?」

「ジョンジーが肺炎だと聞いたんだが、病態は重いのか?」

「ジョンジーは、ただの風邪よ。だけど心の病いにかかっている。
毎日、隣りのアパートのツタの葉っぱをかぞえてて、
全部葉っぱが落ちたら、自分の命も天国に召されると思ってるのよ」

「葉っぱが無くなったら、死んでしまうと思ってるだって!」

ベアマンは、これを利用する手はないと考えた。

(葉っぱが落ちなければ、ジョンジーは死の罫惑から解放放たれる。
後になって、その落ちない葉っぱをオレが描いたことを知れば
ジョンジーは、オレに感謝するだろう！
ジョンジーの想い出に、オレの存在を刻みつけてやる!!)




カラカラになった黄色と黄緑の絵の具を、ねっとりした眼差しでにらみつけていた。

吹きすさぶ嵐を劇的な演出だと酔いしれて、
よせばいいのに叩きつけるような雨の中、
ベアマンは隣りのアパートの壁に一枚の葉っぱを描いていた。

(ジョンジーの心に、オレの記憶を!ジョンジーの魂に、オレさまをッ!!)





翌朝、ジョンジーは死にゆく自分に浸りながら、
「今日、私は天国に召されるのだわ!」と、スウに語りかけながら窓を開けた。

隣りのアパートの壁に、へたくそな葉っぱの落書きがあったが、
あまりのひどさに、スウは吹き出しそうになった。

「ああッ!昨日は嵐だったのに、風で全部飛ばされてしまったと思っていたのに。
たった…たった一枚だけ葉っぱが残っているわ!!
私は、死なない。
私は…やっぱり神様に選ばれているのだわッッ!!!!」

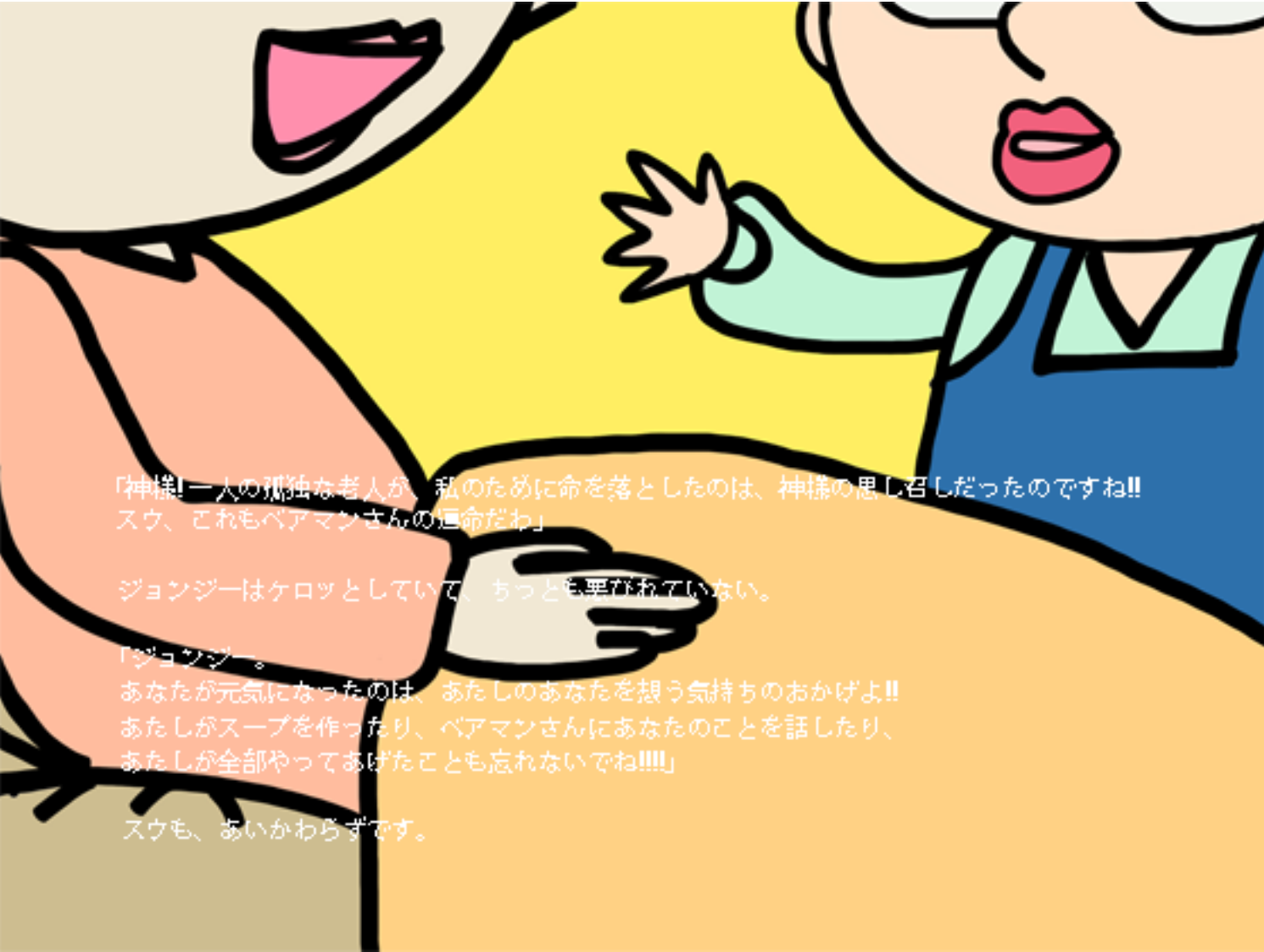
ジョンジーは極度に目が悪く、本物の葉っぱに見えていた。

「ジョンジー。さっき管理人さんから聞いたんだけど、あの落書きはベアマンさんが描いたそうよ。
梯子の下に倒れてて病院に運ばれたそうだけど、肺炎で亡くなったって……」

「ベアマンさんが……」

「……ええ」





「神様!一人の孤独な老人が、私のために命を落としたのは、神様の思し召しだったのですね!!
スウ、これもベアマンさんの運命だわ」

ジョンジーはケロッとしていて、ちっとも涙が落ちていない。

「ジョンジー。
あなたが元気になったのは、あたしのあなたを想う気持ちのおかげよ!!
あたしがスープを作ったり、ベアマンさんにあなたのことを話したり、
あたしが全部やってあげたことも忘れないでね!!!!」

スウも、あいかわらずです。

ペアマンは生きていた。

運び込まれた病院で、医者の説明を聞いていた。

「ペアマンさん、あなたには死んでもらいました。
あなたのジョアンナへの気持ちは、スウから聞いている。
あの人贖がせな娘ジョアンナに、あなたが犠牲になったという罪の意識を
持たせるためです」

「どうして、そんなことを!」

「あの女は、名門生まれの横を振ったのだ!
この恥辱を晴らさなければ、腹の虫がおさまらない!!」

「……………」

「だから、正義のウソをつかせてもらいました」





「先生、オレを帰してくれないか」

「帰る? ベアマンさん、あなたはもう死人なんです」

「帰してくれ、先生」

「僕の一族は政治家や軍人、学者を多く輩出しているんです。
その中で、僕だけがただの町医者っていう屈辱感分かるか」

「帰してくれ!!」

「ベアマンさん。僕のために…いや、医学の発展のためですが、
あなたの体を役立たせてもらいますよー」

おしまい

